

井浦グループ 資源物の買取実証を開始

白グルー 海外の処理システム導入も

白井グループ（東京フロンティア）は、関連会社の白井エコセンター（東京・足立、滝口千明社長）鹿浜事業所で、家庭から発生する資源物の買い取り実証を行った。指定する品目を持ち込みで受け付け、運搬コストを家庭に負担してもらうことで、

資源の価値を現金で還元する。米カリフォルニア州などで実際に行われているシステムについて、日本でも事業化をねらうもの。同社は今年度、ロ

サンゼルスに支局を設置し、海外で行われている有効な廃棄物処理システムの輸入を行っていきたい考えだ。

1キログラムあたり新聞紙15円、PETボトル40円、缶50円、食用油1リットルあたり100円以上の4品目を受け付けた。8月30日に行った第1回目の実証には36人が訪れ、合計で1・5トンの資源物を回収した。1人当たりの平均買い取り価格は840円。

資源物の小口回収を行う場合、収集コストが負担となる。各家庭からヤードに持ち込んでもらうことで、資源

価値をそのまま家庭に還元できる。また、価値を理解してもらうことで、リサイクルへの意識付けをねらえるという。資源相場が下がっても、収集コストが発生しないこのシステムであれば、運搬費で

月1回程度で実証を行っていく計画で、事業として軌道に乗ればリユース品の買い取りなども手掛けたい意向だ。同社はこれまで廃棄物処理事業を企業向けに行ってきたが、一般市民向けにも拡大したいとしている。

食用油は一部の自治体でしか資源として回収されていないため、賞味期限切れの新油の持ち込みなども見られ、新たなリサイクルルートとしての認知も期待される。同社は保有するディーゼル車すべてにバイオ燃料を導入しているため、原料としての利用も視野に入れている。

白井エコセンターの滝口社長は、来場者アンケートの結果から一般市民が資源抜き取りなどへの不信感を抱えていることに触れ、「一般市民はリサイクルや廃棄物の処理に選択肢を持っていない。自発的な選択をしてもらうことに大きな意義がある」と話している。

推進団体連絡会 3R

静脈資源の認識を

容器包装3Rフォーラム

3R推進団体連絡会は10月6日、東京国際交流館（東京・江東）で第3回容器包装3R推進フォーラムを開催し、課題を共有化するための検討を行った。基調講演に立つ

た慶應義塾大学経済学部・細田衛士教授は、汚れた廃プラスチックを国外に出してはいけないとしながらも、「使用済み製品・部品・素材は廃棄物というよりも静脈資源」というとらえ方をすべき」と訴えた。



和田國男会長

冒頭、連絡会の和田國男会長は、「主体間の連携は難しい部分があるので、いろいろな分野からお集まりいただきありがたい。課題の共有化がで

ば、運搬費で



36人が会場を訪れた